恩林寺広報

No 118
令和三年（二〇二一）新年号
臨済宗建長寺派東光山恩林寺
電　話　〇二七六―八八―三五六四
ＦＡＸ　〇二七六―八八―四一三二
郵便番号　三七〇―〇六〇一

謹賀新年

明けましておめでとうございます。本年も檀信徒各家の平安を、心よりご祈念申し上げます。

新型コロナウイルス感染拡大防止のお願い

檀信徒各家におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。この度の新型コロナウイルス感染拡大を受け、当山に於きましても、諸行事、法事等の中止や延期、葬儀の縮小等々、対応に追われる日々が続いて居ります。引き続きコロナ対策（手洗い・マスク着用・換気等）や規模縮小などに努めながら、当山が感染源にならない様、対応して参りたいと思います。併せて檀信徒の皆様方にも、感染拡大防止の取り組みへのご理解とご協力をお願い致します。日々厳しい状況の中、最前線で闘う医療従事者の方々に心からの敬意を表しますと共に、闘病中の皆様の治癒と、一日も早く事態が収束し日常が戻ることを願いつつ、皆様方もくれぐれもご自愛戴きます様お願い申し上げます。

年末年始の諸行事について

感染症による社会情勢を鑑みまして、大晦日除夜鐘撞きは中止とさせて戴きます。また新年二日の祈祷会は、縮小して厳修致します。

ご用心、ご用心

とんち咄で有名な一休さんにはこんな逸話があります。

ある年のお正月の事。ぼろぼろの衣を身に着けた一休さんは、杖の先にしゃれこうべを付けて家々を廻り、人が出てくるとそれを突き付けて「このとおり、このとおり。ご用心。ご用心」と言いながら町中を歩き廻りました。

せっかくのおめでたいお正月なのに縁起でもないと、みな門を閉ざしてしまいました。

それを見るに見かねた人が「一休さん。みんなが新年を迎えられたことをお祝いしているおめでたいお正月に、そんな不吉なことをしなくても良いのではないですか」と非難すると、一休さんは「何を言うか、このしゃれこうべほどおめでたいものはないではないか」とこのような歌を詠みました。

にくげなき
このしゃれこうべ
あなかしこ
目出度くかしく
これよりはなし

「にくげなき」とは、しゃれこうべに肉がないことと憎らしく思うことを掛けています。

私たちは生きているうちは、どうしても欲というものが無くならないものですが、死んで骸骨になればもはや欲も無く、誰に憎まれることも無くなります。そのような煩悩などきれいさっぱり抜け落ちた姿、目がくぼんで目の穴が出た様子を「お目出たい」と掛けて、それこそが一番尊いのだ、と一休さんはとんちを効かせて伝えているのです。

誰でも楽しいことがずっと続けば良いと思うでしょう。けれども生に限りがあることを忘れてただ快楽だけを追い求めていては、本当に大切なものを見失ってしまうかもしれません。

いつか必ず訪れる死を肝に命ずることで、その生をより輝かせることができるのです。

ほとけさまとの約束

『この一年、仏さまの教えをしっかりと守ります。自ら進んで実行いたします』という約束です。

あなたの願いが叶えられるかどうかは、あなたが仏さまにお約束したことをしっかりと守るかどうかにかかっています。

厄除けのお守りや商売繁盛のお礼など、どれもみな信心があってこそ意味があることで、いただいて帰ればそれで何も心配なしということにはなりません。

どんなにご祈願しても、それを叶えるための実践を怠ればご利益はいただけません。

喫茶去（きっさこ）

▼まずはお茶でもお召し上がりください

素直に解釈すると「お茶を飲んだら去れ」となってしまいそうですね。

たしかに、会席や宴会などでは最後にお茶が出されることが多く、今日の料理はこれでおしまいです、という合図にもなっています。実際に、ある作法では、この言葉が正式に終わりの合図になっているそうです。

しかし、禅でいわれる「喫茶去」の意味は逆。「さあさあ、よくいらっしゃいました、先ずはお茶でも召し上がってください」と、来客を歓迎し、労る言葉なのです。

同じ釜の湯を一緒にいただくところに意義があります。お茶を通して互いの気持ちがひとつになることが大切なのです。どんなに忙しい毎日であっても、静かにお茶をいただく心の余裕をもっていたいものですね。

禅宗の寺院では、行事のある日やその前日に「総茶礼」といって、長老から若い僧に至るまで、一堂に会してお茶をいただきます。行事に関する打ち合わせや最終確認をするための集まりではありますが、ともに静かにお茶をいただくことで、大事な行事を成功させましょうと、全員の気持ちが一つになることがいいのです。

●象と仏教の縁は深い！●

動物園で人気の高いのが「ゾウ」。漢字で書きますと「象」ですね。

実は象と仏教の関係も浅くはありません。

お釈迦さまがお元気であった頃のことです。多くの人々がお釈迦さまをおしたいすることを憎らしく思った従兄のデーバダッタが、仲間を連れて立てこもった山の名前が〝ガヤーシーサ山〟です。ガヤーが象、シーサは頭、つまり象の頭に似た山という意味で、これを漢訳して象頭山。

四国の香川県にある金比羅さまがおまつりされている山を象頭山（琴平山ともいわれている）と呼びますが、これも遠くインドに由来した名前なんですね。

お釈迦さまがお生まれになる前に、お母さまのマーヤ夫人は白い象が体内に入ってくる夢をごらんになったと伝えられています。いずれも象と仏教の深い縁を物語っています。

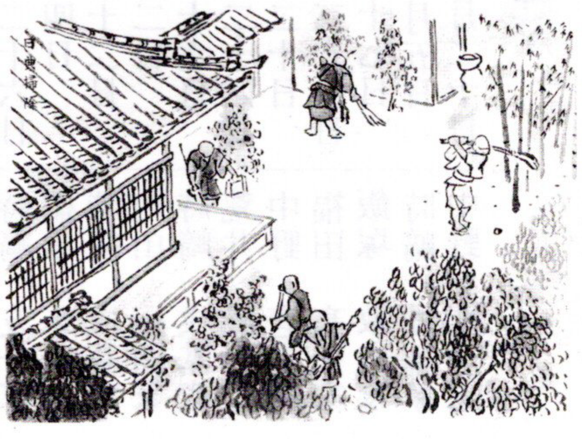
●絵で見る禅の修行生活　雲水日記㉓

※雲水（うんすい）修行僧のこと。行雲流水のように淡々として一処に止住せず、正師を求めて遍歴する意よりくる。

日天掃除（にってんそうじ）

雲水の掃除の躾（しつけ）の綿密さは徹底したものだ。朝の独参（どくさん）がすめば、堂内（どうない）・常住（じょうじゅう）とも待ち構えていたように屋外掃除にとりかかる。雨降りでないかぎりこの日天掃除（にってんそうじ）は絶対欠かさぬ。これは百丈和尚（ひゃくじょう）の「一日作（さ）さざれば一日食らわず」を体得とするとする一つの作務（さむ）を行ずるためで、誰の命令があるでもなく、報酬を期待するのでもない。各自黙々と正念（しょうねん）を守りつつ落葉を掃き草を引く。決して世間の単なる労働ではない。身心の凝りを解くとともに、「動」の中で生きた自己を捉える坐禅の動的表現だ。

中峰和尚（ちゅうほう）「座右銘（ざゆうめい）」には「常に苕箒（じょうしゅう）を携えて堂舎の塵を払え」とあり、神秀上座（じんしゅうじょうざ）は「時時に勤めて払拭（ほっしき）せよ、塵埃（じんあい）をして惹（ひ）かしむるなかれ」といって、自己心内の無明煩悩（むみょうぼんのう）の掃除をせよと誡めている。庭を掃いているいる趙州に、ある僧が「和尚は天下の大和識というのにどうして塵があるのか」と問うた話（わ）、清掃中、竹に当たった小石の音で悟りを開いた香厳（きょうげん）和尚の話（わ）などから、禅機は日常どこにあるかも知れないことが思われる。



屋外掃除

恩林寺ホームページ

恩林寺に関する情報が満載です。動画や写真をまじえ、過去の行事や出来事、案内事項など常に新しい情報を発信して居ります。是非ご覧になって見てください。

URL http://www.onrinji.net/